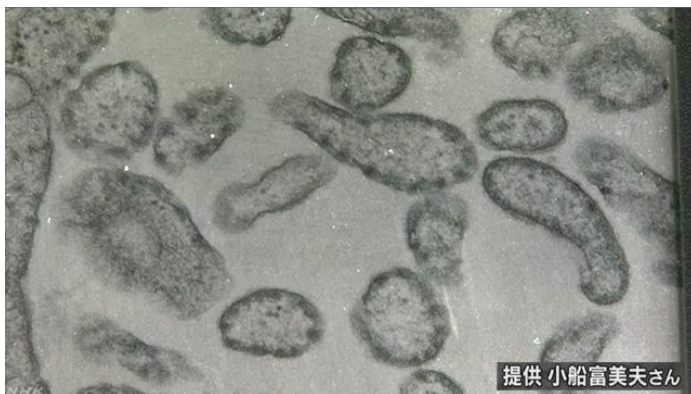


大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3233号 2016.9.3 発行

News Up はしか 知っておくべき5つのこと



NHKニュース 2016年9月2日

肺炎や脳炎などを起こして、命の危険もある「はしか」（麻疹）の患者の報告が急増しています。ワクチンを接種していないなど免疫がなければ、感染した人と同じ空間にいただけでうつってしまう「はしか」。今年に入ってから感染者は、これまでに60人近くと多くの人々が移動した夏休みに空港やコンサート会場などを中心に感染が広がっています。関西空港では、これまでに従業員2

6人が「はしか」と診断されたほか、千葉市の幕張メッセで開かれたコンサートや東京・立川市で行われたアニメ関係のイベントに「はしか」の患者が参加していたことが分かり、感染の広がりが懸念されています。「はしか」とは、どういう病気なのか。感染を防ぐために、私たちはどうしたらいいのでしょうか。

1 そもそも、どんな病気？

「はしか」は、ウイルスによって引き起こされる感染症で、「麻疹（ましん）」とも呼ばれます。

まず、発熱や咳、鼻水などの軽いかぜのような症状がみられたあと、39度以上の高熱が出て、顔や体に発疹が現れます。患者の3割が、合併症を起こすとされ、多いのは肺炎や中耳炎です。また1000人に1人が脳炎を起こすとされ、後遺症が残り、死に至ることもあります。また、10万人に1人くらいというまれなケースですが、感染後、数年から10年ほど経って、亜急性硬化性全脳炎＝SSPEと呼ばれる脳炎を発症し、知的障害や運動障害が進行していくことも報告されています。

「はしか」の最大の特徴は、他の感染症に比べて、感染力が非常に強いことです。空気感染するので、免疫がなければ、職場や電車の中などの同じ空間にいただけで、感染することがあります。免疫がない人たちの中に、1人の「はしか」の患者がいたとすると、12人から14人の人が感染するともいわれ、1人から2人に感染する通常のインフルエンザと比べても、感染力の強さは突出しています。

「はしか」は、一度発生すると、あっという間に広がり、昔は、なすすべもないまま死に至ることが多かったため、江戸時代には、生死を分けるほどの重い病気として「はしか」を「命定め」と呼んだということです。

2 はしかにかかりやすい人はどんな人？

「はしか」に治療薬はありませんが、非常に有効な予防策があります。ワクチンの接種です。「はしか」のワクチンは、昭和53年から定期接種となり、1歳から6歳までの子ども

を対象に接種が勧められました（平成7年4月から17年度までは7歳半まで）。戦後も、大きな流行を繰り返していた「はしか」ですが、この定期接種の導入で、減っていったのです。ところが、9年前の平成19年には、「はしか」が、ワクチンを接種したはずの若者の間で大流行しました。大学などで感染が広がり、休講が相次いだことを、覚えている人もいます。

せっかく機会があったのに、ワクチンを接種していない人がいたほか、1回だけの接種の期間が平成18年3月まで続き、免疫が時の経過とともに弱くなっていたからだと言われています。

実はこうした問題は、以前から指摘され、国は若者の大流行が起きる前の年の平成18年4月から、「はしか」のワクチンを風疹との混合ワクチン＝MRワクチンに切り替え、確実に免疫をつけるため、1歳と小学校入学前に2回、接種が行うようにしました。

また、若者の間での大流行を受けて、平成20年から5年間は、中学1年生と高校3年生を対象に、MRワクチンの接種を行うなどの対策を取りました。

平成2年4月2日以降に生まれた人、つまり今の26歳より若い人は、これまでに2回、ワクチンを接種する機会があり、きちんと接種していれば、「はしか」にかかる危険性は、かなり低いと言えます。

一方、それより前に生まれた、今の26歳から39歳の方は、ワクチンを接種する機会が1回だけでした。子どものころワクチンを打っていても、免疫が低下している可能性があり、「はしか」に最もかかりやすい年代と言えます。

さらにそれより上の年代ですが、この年代の人たちは、ワクチンを接種する機会がなく、多くの方は「はしか」に自然に感染しています。「はしか」に一度かかったことがある人は、通常、生涯免疫があります。「自分は子どものころ、『はしか』にかかったから大丈夫」と思っている人も、昔は、症状だけで、「はしか」と診断していたため、風疹や、りんご病など、発疹が出る他の病気と間違えている可能性もありますので、注意が必要です。

もし、「はしか」にかかったかどうかがわからず、2回の予防接種を受けていない人は、近くの医療機関にMRワクチンの在庫があるかを確認して接種することもできます。保険がきかないため、費用は医療機関によって異なりますが、8000円から1万円くらいです。

3 なぜ今ひろがっているのか？

実は日本の「はしか」は、去年3月、WHOから「排除状態」と認定されました。日本の土着のウイルスによる感染が3年以上押さえ込まれていたからです。

ではなぜいま、「はしか」の患者が急に増えてきたのでしょうか。

厚生労働省によりますと、関西空港の従業員もふくめ、7月の終わりに関西空港を利用した人から検出されたウイルスは、H1と呼ばれる、中国やモンゴルで流行している型だということです。

また、7月から8月にかけて、千葉県松戸市を中心に10人ほどの患者が報告されていますが、検出されたウイルスはD8という、東南アジアや南アジアなどで流行している型です。アジアやアフリカなど、世界にはまだ「はしか」が流行している国がたくさんあり、国内にも持ち込まれているのです。

日本で排除状態になっても油断はできません。免疫が低い人が海外に行き感染して帰国したり、外国から来た人が持ちこんできたりする危険性は常にあり、免疫がない人が多いと、流行のおそれはなくなるのです。

専門家は、今後は海外で流行する遺伝子タイプのウイルスが日本に定着し、土着のウイルスとなってしまうことを懸念しています。

4 患者がいた場所にいた人はどうしたらいいの？

関西空港や幕張メッセでのコンサート、アニメ関係のイベントなど、「はしか」の患者がいた場所が、次々に公表されています。

「はしか」は、発疹が出る5日ほど前から5日後くらいまで、周りに感染させるおそれがあり、感染後は10日から12日間の潜伏期間を経て発症します。

もし、「はしか」の患者と接触した場合は、厚生労働省によりますと、72時間以内であれば、ワクチンを接種すると、発症を予防できる可能性があるということです。

そして、もし、熱や咳、鼻水などのかぜのような症状が出て、「はしか」の患者との接触が否定できない場合は、要注意です。不用意に医療機関を受診すると、移動の際にさらに感染を広げるおそれがあるからです。

事前に医療機関に電話で連絡をして、「はしか」の患者と接触したことを伝え、指示に従って受診するようにしてください。

5 私たちにできることは？

今年に入ってから先月24日までに報告された、「はしか」の患者32人のうち9割近くがワクチンを接種したことがないか、接種したかどうか分からない人たちです。なかには、MRワクチンの接種の対象となる1歳より前に感染してしまった赤ちゃんもいます。沖縄では、平成11年から13年の間に、2度の流行があり、その際に0歳児を含む9人の幼い子どもが亡くなりました。

生後10か月で「はしか」にかかり、重い肺炎を起こして、その後、日常生活で酸素の吸入が必要になった子どももいます。

そうした麻疹のワクチンを打つ前の赤ちゃんや、病気などで免疫力が低下した人たちを守るためにも、1人でも多くの方がワクチンを接種して、感染を広げない対策が重要です。特に海外に行く人は、「はしか」にかかったことがなく、ワクチンを接種していない、または接種したかどうか分からない人は、渡航前にワクチンの接種を忘れないでほしいと専門家は呼びかけています。

平成19年に若者の間で「はしか」が流行した際に、脳炎を起こした20代の男性を取材したことがあります。男性は何か月も意識が戻らず、取材時は両足に後遺症が残って、懸命にリハビリに取り組んでいました。「ワクチンさえ打っていれば問題ないのに、ただそれだけのことをしなかったということで、これだけの被害が起こるとするのは、非常に恐ろしい」と話した男性の姿を見て、私は、「はしか」の怖さを思い知りました。

「はしか」が、これ以上広がらないために、一人一人の行動が重要になっています。

丸川五輪相、リオ・パラ視察へ 「選手の声聞く」 北海道新聞 2016年9月2日

丸川珠代五輪相は2日の閣議後の記者会見で、7日開幕のリオデジャネイロ・パラリンピックを約1週間視察すると明らかにした。開会式に出席し、選手村のほか柔道、水泳、ボッチャなどの会場を見て回る予定で「五輪とは違うサポートが必要になる。できる限り運営と市内の状況を視察し（東京大会の）準備に生かしたい」と話した。

丸川五輪相は8月のリオ五輪視察でエレベーターやトイレの広さが障害者にとって十分か気になったと指摘し「選手の声を聞かせていただきたい」と述べた。

精神指定医100人不正疑い...「相模原」関連も 読売新聞 2016年09月02日

全国の複数の医療機関の精神科医が、強制入院などの判断を行う「精神保健指定医」の資格を不正に取得していた疑いのあることが、厚生労働省の調査でわかった。

不正取得が疑われる医師とその指導医は計100人前後に上り、神奈川県相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、逮捕された容疑者の強制入院措置に関わった医師も含まれているという。

同省は、各医師の弁明を聞く聴聞の手続きを進めており、早ければ月内にも、処分の是非を決める同省の審議会部会を開く。

指定医を巡っては、昨年4月、聖マリアンナ医大病院（川崎市）で、11人が十分に治療に関わっていない患者を診療したと偽るなどして、資格を不正取得していたことが発覚。取得時に提出する症例レポートについて、複数の医師が同じ患者のものを使っていたが、

厚労省の審査では見抜けなかった。このため、同省が過去5年間に申請された医師のリポートを調べていた。

動物Tシャツ、中国で反響 多治見市の障害者がデザイン



岐阜新聞 2016年09月02日
中国の博覧会に出品し、好評だったオリジナルデザインのTシャツ=多治見市田代町、ライフスタイルシティー
多治見市田代町の障害者就労支援事業所ライフスタイルシティー（伊藤雄一代表）が製作したオリジナルデザインのTシャツが、中国天津市で開かれた「天津・世界僑商品博覧会」に出品された。Tシャツは現地で反響を呼び、同事業所関係者を喜ばせている。

同事業所は「サポートされる側からサポートする側へ」を理念に2年前に開所。障害者就労や自立、自活を目指した事業に取り組んできた。

今年立ち上げたデザイン事業は、イベントでのスタッフTシャツを受注するなど実績を上げている。伊藤代表が名古屋市での経営者セミナーで知り合った日本製品を中国で販売する中国企業の目にとまり、「事業所理念に理解を示してくれ、デザイン性も評価を受けた。障害者の人たちの希望に」（伊藤代表）と出展にチャレンジした。

同博覧会は8月26～29日の4日間開かれ、出品したのはデザイン約60種類と13種類のオリジナルTシャツ。1本の線で動物や人、建物を描いたデザイン名「オーリング」のほか、猫や犬などペットをモチーフにしたデザインが「かわいい、癒やされる」と好評で、多くのバイヤーらの問い合わせ、商談があったという。

伊藤代表は「値段交渉はあるが、ライセンス契約も検討する」と手応えを示す。さらに「障害者就労支援の多くの事業は、軽作業や単純作業が中心。障害者の人たちの年収、生活レベル向上を目指し、デザインに注力、特化し、障害者も健常者と同じ土俵で勝負できる仕事を創り出し、人材育成をしていきたい」と意気込んでいる。

非正規雇用は自己責任か？——格差と闘う青年たちの物語【PR】

『小説・非正規外されたはしご』著者、北沢栄氏に聞く

シノドスジャーナル 2016年9月2日
ジャーナリストの北沢栄氏が「非正規雇用」をテーマにした『小説・非正規外されたはしご』を上梓した。過酷な労働環境の中、東大卒の主人公弓田が自らの体験を生かし企業を目指すサクセスストーリーだ。なぜ、小説として本書を出すことになったのか。そして、裁判記録からあぶり出す非正規雇用の実体とは？ 著者の北沢氏に話を聞いた。（聞き手・構成／山本菜々子）

●ストーリー

弓田誠、34歳。非正規雇用の彼は、東大卒にもかかわらず、年収わずか220万円。過激残業、パワハラ、雇い止め——。様々な体験を資産とし、現代ニッポンの格差社会と闘うためにあるプロジェクトをスタートする。外食チェーン、自動車工場、特殊法人、学校、メガバンク…。いずれも過酷な非正規雇用の多面的な構造問題を、小説形式でわかりやすく浮き彫りにする。

労働者の4割が非正規の時代に

——北沢さんは、もともとは共同通信の記者をされていて、長年ジャーナリストとして活躍されてきました。『小説・非正規外されたはしご』では、「非正規雇用」をテーマにした

小説を書かれています。なぜ非正規雇用をテーマとして扱おうと思ったのでしょうか？

非正規の問題には、以前から注目していました。本を書こうと思ったのは、『21世紀の資本』がきっかけです。ピケティが指摘していますが、資本の収益率が経済成長率を上回ると、資産を持っている者が富むため、格差が拡大してしまいます。

日本は、上位10%の富豪による富の占有率が50%以下となっており、米欧より低い。しかしここ数年、日本では格差がずっと問題になっています。その典型例は、正規と非正規との間にあると言えるでしょう。

ぼくは長年ジャーナリズムの現場にいましたが、労働担当記者にとっては、春闘などでの労働組合を取材するのが基本的には主流でした。しかし、労使対立の裁判記録などを追っていると、非正規の置かれている厳しい状況が見えてきました。

一言に「非正規」と言っても、働いている人の4割が非正規雇用者だと言われている現在、多種多様な人がいます。専門的な技能を持った契約社員や、再雇用の嘱託社員、主婦層のパートタイム労働者、派遣社員など、それぞれの置かれている状況は様々です。ですので非正規の問題と言われてもピンと来ない方も多いでしょう。

もちろん、正規でないからこそ、自分の都合のよい時間に働いたり、副業に力をいれられたりなど利点はあるかもしれません。しかし、私が問題視しているのは、「正社員になりたくてもなれない」不本意な非正規の人々です。

平成26年に行われた「就業形態の多様化に関する総合実態調査」では、派遣労働者の37.7%が「正社員として働ける会社になかったから」いまの雇用環境を選んだと回答しています。さらに、仕事内容に正規と非正規との差がないにも関わらず、現在の正規と非正規の間には1:0.6という賃金格差があると言われていました。

その現状を受け、「同一労働・同一賃金」が話題になっていますが、欧米のように職務ではなく年功序列型に賃金を割り振っていくタイプの日本では、どうやって「同一労働」を明確にするのかは難しく、導入にはハードルが高いでしょう。

さらに、非正規を取り巻く問題は、景気の悪化による企業のコスト削減だけでは説明できない。というのも、現在の採用システムは、新卒一括採用が主流であるため、その時期に病気になるなどチャンスを逃すと、かなり厳しい状況に追い込まれます。1年留年できればいいのですが、家庭ごとの事情もありますから、本書の弓田のように日常を維持するために非正規の仕事にまずは就かざるを得ない場合もあるでしょう。

新卒一括採用の慣行から、日本の場合は非正規でキャリアをはじめてしまうと、正規社員として雇用されることは難しい。まさに一度就職に失敗すると、「外された梯子」が待ち受けるわけです。



東大卒でも非正規雇用が待ち受ける

——主人公の弓田は東京大学出身ですが、どのような意図があるのでしょうか。

ぼくは1942年生まれなのですが、そのときの「非正規」はむしろ自由で珍しい生き方と捉えられていました。ぼくも若いときにはヒッピーみたいな放浪をしましたね(笑)。それでも、大学を卒業していたから、最終的にはマスコミに正規社員として入社できたのです。そのような世代からみると、非正規は「自己責任」とか「能力不足」ではないかと思える向きが少なくありません。

力不足」ではないかと思える向きが少なくありません。

ですが、いまの若者たちは選択の結果でもなく、東京大学にいける能力があっても、非正規の職についてしまうことがあります。就職氷河期の時期に就職活動がかぶってしまったらなおさらです。

弓田には実際のモデルがいました。東京大学を出て、非正規になってしまった男性です。

いざ30歳になって、好きな女性ができ結婚しようとしても、年収が200万なので生活で

規労働者しか得られない「体験資産」と前向きに捉え、成長していくのです。

非正規体験を活かす、ひとつのロールモデルを提示

——本書はサクセスストーリーですよね。最後のメインバンク編からは、衝撃の事実がわかり、それを利用して弓田はのし上がっていきます。因縁が因縁を呼ぶすごい展開です。これは、小説ならではの展開ですよね。弓田は知力・体力・運のすべてにかなり恵まれているように見えるのですが、非正規に限らず、一般的にあまり見当たらないヒーローのような強い人物像ではないかと感じました。

そうですね。勇敢にブレークスルーに挑んだ一種のヒーローだと思います。ぼく自身、一つのロールモデルを示してみたかった。現在、非正規雇用の若者たちの描かれかたは、自己責任と言いたくなるような勝手なタイプだったり、悲惨でかわいそうな面が強調されたり、「年収200万でもいいかなあ」と自分の状況を受け入れ、それでも幸せに生きるというふうなものが多い。

——社会のメインストリームに挑むような話ではないと。

ですが、発想を逆転して、「非正規だからこそ」その体験を生かせるような仕事がないだろうかと考えました。正規の縦割り体験と違い、非正規の多くの場合、業種を横断的にまたいで様々な仕事を転々としてします。

現在の日本では、これをキャリアとしてネガティブなものだと捉えています。もしこれを「体験資産」と位置付けると、非正規の違った面が出てくるのではないのでしょうか。弓田は、転々としながらも自らネットワークと友人、サポーターをつくっていき、体験資産を生かした起業をします。

もちろん、弓田と同じような行動をするのは難しいかもしれませんが、非正規でも発想を逆転することで希望が現れる。その道筋を本の中では物語というかたちで示しました。「こんな小説だろ」と読みながら思われるかもしれませんが、「もし自分だったらどうするだろう」「こうやるのではないか」などと考えながら読んでみてほしいですね。

小説・非正規 外されたはしご 著者/訳者：北沢 栄 出版社：産学社（2016-06-28）

定価：¥ 1,620 Amazon 価格：¥ 1,620 単行本（ソフトカバー）（286 ページ）



ISBN-10：4782534418 ISBN-13：9784782534410

北沢栄（きたざわ・さかえ） ジャーナリスト

1942年12月東京生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。共同通信経済部記者、ニューヨーク特派員などを経て、フリーのジャーナリスト。2005年4月から08年3月まで東北公益文科大学大学院特任教授（公益学）。公益法人問題、公務員制度、特別会計などに関し、これまで参議院厚生労働委員会、同決算委員会、同予算委員会、衆議院内閣委員会などで意見を陳述。07年11月から08年3月まで参議院行政監視委員会で客員調査員。10年12月「厚生労働省独立行政法人・公益法人等整理合理化委員会」座長として、報告書を取りまとめた。主な著書に『公益法人 隠された官の聖域』（岩波新書）、『官僚社会主義 日本を食物にする自己増殖システム』（朝日選書）、『静かな暴走 独立行政法人』（日本評論社）、『亡国予算 闇に消えた「特別会計」』（実業之日本社）、連詩『ナショナル・セキュリティ』（思潮社）、近著に中小企業小説『町工場からの宣戦布告』『小説・特定秘密保護法 追われる男』（産学社）。訳書に『リンカーンの三分間 ゲティズバーグ演説の謎』（ゲリー・ウィルズ著、共同通信社）。日本ペンクラブ会員。現代公益学会理事。



統合失調症患者の判断力など短時間で計測 阪大など解明 朝日新聞 2016年9月2日

よく知られた知能検査の一部の項目を使うだけで、統合失調症患者の理解、判断力などを短時間に測ることができることを、大阪大などの研究グループが明らかにした。

約100人に1人が統合失調症の患者とされ、発症の平均年齢は20代前半。妄想、幻覚、意欲低下などの症状がある。患者の約半数は判断力や記憶力が落ちる「認知機能障害」もあるが、その程度をつかもうにも、現在の知能検査は長時間かかり使いにくかった。

同大の橋本亮太准教授（精神医学）らは知能指数の測定によく使われる知能検査に着目。1時間半かけて13の検査課題をするが、統合失調症に特徴的な障害などを考慮し、患者150人の実験で評価した結果、二つの課題だけで患者の知能指数を適切に測れることが分かった。

二つの課題で出した知能指数から、電話をかけたやおつりの計算をしたりなど、日常生活で出来ることの程度もわかる。患者本人や家族に暮らしのなかで出来ることを目安を示しやすくなるという。橋本准教授は「10分程度で測れるので使いやすいうえ、統一の評価が可能になる」という。

研究内容は米科学誌電子版に発表した。（後藤一也）

アミロイドβの減少を確認 アルツハイマー病の新薬治験 朝日新聞 2016年9月1日

初期のアルツハイマー病患者を対象にした新薬の臨床試験（治験）で、患者の脳に蓄積するたんぱく質「アミロイドβ」を減らすことができた米バイオジェン社などのグループが、1日付英科学誌ネイチャーに発表する。認知機能の低下を防ぐ効果については、さらに大規模な治験で確認する必要があるという。

治験の対象は、初期のアルツハイマー病または軽い認知障害のある人で、脳にアミロイドβの蓄積が確認された165人。2グループに分け、新薬「アデュカヌマブ」と偽薬（プラセボ）による治療を1年続けた。その結果、薬の量が多いほど、脳のアミロイドβを減らす効果が高いことを陽電子放射断層撮影（PET）による画像で確認した。薬の量が多いほど、認知機能の衰えを抑えることも示されたが、効果については、現在進行中の大規模な治験で確認していく。

治験では、定期的な脳の画像検査などで、安全性に配慮しており、20人は脳浮腫や頭痛などの副作用のために治療を中止した。

アミロイドβを標的にしたアルツハイマー病薬の開発はこれまで失敗続きだった。病気が進み、神経細胞が減った患者を対象にしたことが主な原因と考えられており、早い段階を対象にした複数の治験が行われている。（瀬川茂子）

総務相、自治体防災マニュアル再点検を指示 ytv ニュース 2016年9月2日

台風10号で大きな被害が出ていることを受け、高市総務相は、全国の自治体が作成した防災マニュアルの再点検を要請するよう、総務省消防庁の長官に指示した。総務省はこれまで、市町村長が避難勧告などを発令する判断基準をあらかじめ定めておくよう促してきた。しかし高市総務相は、「過去に経験のないような集中豪雨により、従来は安全とみられた地域で大きな被害が発生している」と指摘。5年前の紀伊半島大水害でも、流木により橋の橋脚が破壊され孤立した地域があったことなどを挙げながら、「川の形など地域の実情を踏まえ、防災体制を再点検する必要がある」として、都道府県に対し域内の市町村の防災計画やマニュアル再点検を要請するよう、総務省消防庁の長官に1日、指示したことを明らかにした。要請は、早ければ来週にも行われる見通し。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

